

「行って来ます」「ただいま」は、  
あたり前のことではなく、大切な言葉

Y . H

私のこの辛さ、悲しみ、苦しみはある日の電話から始まりました。

平成11年9月15日、私と夫が眠りにつこうとした時、電話のベルが鳴りました。

「岸和田警察署です。洋介さんが事故に遭いました。直ぐに市民病院へ来てください」

私達は何が何やら解らないまま、病院へ駆け付けました。そこで見た今は亡き洋介の姿は信じられないものでした。直ぐにICUに入り、医師は、主人に洋介の容態を説明していたような気がしましたが、私はただ呆然と洋介の側に立ちつくすことしかできませんでした。

あくる日、洋介は押し潰された肺の手術を受けました。

9月15日は、岸和田<sup>だんじり</sup>地車祭りの日、この日は、違法駐車が道路をうめつくし、警察も祭りの警備で例年駐車違反を取り締まることができず、それで洋介のバイクが脇から出て来た車を避けるため反対車線にはみ出し、対向車と正面衝突したとのことでした。

ICUに入り、洋介は必死に生きようと頑張ってくれました。ICUに入って1週間のことは、私はほとんど覚えていません。ただ涙を流し、ICUの扉の前で立ちつくしていたようです。洋介の意識が戻ることをただただ願

う、それだけでした。でもそんな願いもむなしく、9月22日午前2時、洋介は静かに息をひき取りました。もう二度と洋介は私を「お母さん」と呼んでくれることはなくなりました。洋介はとても心優しく、父の日、母の日、また、親の誕生日には少ないお小遣いから必ずプレゼントを買ってきてくれました。

事故が起きたあの日、洋介が出かける時、私がもう一言洋介に言葉をかけてやっていたら、という思いが私の頭から離れず、自分を責め続けています。

「行って来ます」と言って出かけた大切な人が「ただいま」と言って帰ってくる。これは決して当たり前のことではないのです。とてもとても幸せなことなんです。どうかこのことを忘れないでください。

辛い想いをした大阪を離れ今、山口県の角島という所で暮らしています。島の青い空、青い海を眺めながら、いつも洋介の姿を探しています。そして涼しい風が吹くと「あっ、洋介が今来てくれている」と感じる事ができています。

島の豊かな自然が私を癒してくれています。そして三十三回忌をしてやれるように、元気で居ようと思っています。

いつの日か、私も洋介の所に行けるでしょう。そして、洋介に会えた時、大きな声で言ってあげたいです。

「おかえりなさい」と・・・。